

巻頭言

基本技術の励行



(財) 日本植物調節剤研究協会 理事 岩本 毅
(社) 日本植物防疫協会 理事長

昨年暮れから年初にかけて世界各地での異常気象が報ぜられた。その代表は欧米での希に見る高温、豪州での干ばつや我が国をはじめ世界各地での暖冬傾向などで、地球温暖化の予兆とむすびつけた議論も盛んである。

今年の盛夏期にむけての農業生産が開始されるに際して、春夏作の栽培管理に関連した技術指導が各方面から精力的に開始されるが、その際、暖候期の天候の推移に対応した技術対策の中で、最も強調されるもののひとつが水田の水管理や病害虫・雑草防除といった基本技術の励行である。植物防疫対策上は、その基幹をなす農薬の適正使用がなにより重要である。昨年5月のポジティブリスト制度の施行に伴い、農薬散布にともなう漂流飛散（ドリフト）の影響が懸念されたが、生産の第一線にたつ関係指導機関の皆様方大変な努力もあって、幸いなことに大きな問題とはならなかった。農薬処理後の水田止水期間7日の厳守や散布に伴うドリフト低減対策などの基本技術の遵守によって、試験のポジ制度2年目を乗り越え実りの秋を無事に迎えたいものである。

高齢化や労力不足に直面する農家にとって、農薬の使用基準の遵守をはじめさまざまな栽培管理の基本技術を励行することは、課せられた重要な責務ではあるが、その実践は言うほど容易なものではない。農薬を提供する側からのきめの細かい情報提供にもとづき販売者と農家が一体となって適正使用に取り組むことのできる環境づくりが今こそ求められる所以でもある。

これまでに、以前からの「農薬管理指導士」、「防除指導員」、「農薬安全コンサルタント」、

「緑の安全管理士」の他に近年は「農薬適正使用アドバイザー」も加わって、農家の方々と直接に接して指導することもできる専門的な知識と技術を有する多数の指導者が全国各地で活動している。名称や養成・認定する組織機関が異なるとはいえ、その使命と果たす役割に差異はない。このような指導者層の厚みがさらに増して、農薬使用に際して農家から信頼される第一線の指導者として、従前に増した実力を発揮できる状況をつくり出す関係者の努力も必要と考える。

ところで、ドリフト低減対策の効果を確認するための調査をつうじてドリフト低減ノズル、ネット、遮蔽物（ソルゴーなど）、風量低減（スピードスプレーヤ）などの有効性が認められてはいるが、最も必要なことは、散布時の風速・風向、適正な散布圧・量などの基本的条件に十分配慮することの重要性を農薬使用者個々に如何にして理解し実践してもらうかである。また、既存の散布技術についてもドリフト低減と防除効果を高いレベルで両立させるという目標をかかげる限り、課題解決への道のりは遠い。微粒剤Fなどへの早急な転換など農薬の剤型面からの検討に加え散布装置そのものの構造・機能面からの見直しが不可欠であろう。散布地域の周辺作物や生活環境さらには散布作業者の健康に対する影響などに限りなく配慮した薬剤散布を実現するためにも、鍵となるドリフト低減をめざす農薬と機械双方の技術力のさらなる協調によるより優れた散布技術の開発に期待をかけたい。